

## 村の世帯・人口

昭和49年8月末日現在

総世帯数 2,588戸

人 口 11,704人

男 5,925人

女 5,779人

## 月の人口移動

出生 33 死亡 3

転入111 転出 63

婚姻 6 離婚 1



# らには報広

発行所・

西原村役場

電話 (098995) 5011

5013・5012

印刷所

桑江印刷所

電話 (098995) 2365

## 一、村政情報

一、向こう四カ年の選良決まる……………1

一、またまた石油流出事故……………3

一、第二回交通量調査結果報告……………4

一、新しい村立保育所着工される……………7

一、九月十五日敬老の日 村から満八〇才

以上のお年寄りに敬老年金の支給……………7

## 二、村民の広場

一、村へ百本の大王やしを寄贈……………8

一、村兼久若松会、優良老人クラブの表彰……………8

## 三、告知板

一、十月一日から共同募金……………9

一、オーナー・インタビュー……………9

調査に協力しましょう……………9

一、十一月一日から農業……………9

センサスの準備調査始る……………9

一、農業センサスの調査員募集……………9

一、調整区域内での建築物予定者は

早めに届出をしましょう……………10

一、十月十三日～十九日、行政相談週間……………10

助け合いの輪を広げましょう

## 村政情報

## 向こう四カ年の選良決まる

去る九月八日、午前七時から午後

六時にかけて、第一投票会場（村役

場ホール）第二会場（坂田小学校）

に分れて村議会議員選挙が行なわれ

ました。

先きの議会で定数条例が改正され

十六名の定数から二〇名に改正され

ました。

今回の選挙では、この二〇名の議

席を争って二十六名の立候補者が出

て一週間にわたる激しい選挙戦を終

えて投票日を迎えました。

日ごとに高まりを見せた選挙の結果

果は、二会場における有権者の投票

率からも読み取れました。

敵選な有権者の投票の結果は別表

の一に見る通りで、これで二〇名の

議員が決定され、向こう四カ年の村

議会の円滑、有効な活動を担って

いただくことになりました。

投票率は 第一会場で九〇、九九

パーセント、第二会場では八九、一

三パーセント、全体では九〇、三二

パーセントとなっています。

写真で、今度、村議会議員となら

れた二〇名の方を御紹介致します。

なお敬称は略させていただきます。



親泊 輝武  
与那城



与那城長助  
安室



比嘉 昭幸  
棚原



城間 光雄  
我謝



新垣 盛光  
我謝



翁長 正吉  
幸地



大嶺 盛義  
小波津



与儀 栄  
津花波



新川 康之  
小那覇



稲福 恭助  
上原



中山 正徳  
小那覇



与那城 勲  
兼久



新垣 常夫  
伊保之浜



稲福 勝美  
兼久



大城 盛孝  
内間



新垣 和男  
翁長



宮平 宗輔  
与那城



宮平 安司  
与那城



小波津享元  
小波津



屋良 朝光  
上原

昭和49年9月8日執行の村議会議員選挙結果  
(別表1)

| 当落 | 氏名    | 出身字  | 政党別  | 得票      |
|----|-------|------|------|---------|
| 当選 | 新垣盛光  | 我謝   | 無・現  | 334.388 |
| 〃  | 城間光雄  | 〃    | 社大・現 | 296     |
| 〃  | 比嘉昭幸  | 棚原   | 無・現  | 290     |
| 〃  | 与那城長助 | 安室   | 無・新  | 268.073 |
| 〃  | 親泊輝武  | 与那城  | 無・現  | 251     |
| 〃  | 稻福恭助  | 上原   | 無・現  | 251     |
| 〃  | 新川康之  | 小那覇  | 無・新  | 247.650 |
| 〃  | 与儀栄   | 津花波  | 無・現  | 246     |
| 〃  | 大嶺盛義  | 小橋川  | 無・新  | 246     |
| 〃  | 大翁長正吉 | 幸地   | 無・新  | 243     |
| 〃  | 大城盛孝  | 内間   | 共産・新 | 231.044 |
| 〃  | 稻福勝美  | 兼久保  | 社会・新 | 231     |
| 〃  | 新垣常夫  | 仲伊保  | 無・新  | 226.296 |
| 〃  | 与那城正徳 | 兼久保  | 無・現  | 222.926 |
| 〃  | 中屋良朝  | 小那覇  | 無・現  | 221     |
| 〃  | 小波津亨  | 上原   | 無・現  | 214     |
| 〃  | 小宮平安  | 小波津  | 無・現  | 214     |
| 〃  | 官平宗輔  | 兼久保  | 無・新  | 213.479 |
| 〃  | 新垣和男  | 与那城  | 無・新  | 208.445 |
| 〃  | 与古田光  | 翁長   | 無・新  | 206.269 |
| 〃  | 銘泉川寛  | 伊保之浜 | 無・現  | 205     |
| 〃  | 官平定昌  | 幸地   | 無・新  | 193     |
| 〃  | 新数幸次郎 | 兼久保  | 無・新  | 167     |
| 〃  | 新川凌   | 兼久保  | 無・現  | 155.075 |
| 〃  | 新川凌   | 兼久保  | 無・新  | 150     |
| 〃  | 新川凌   | 兼久保  | 無・新  | 133.350 |

## またまた原油流出事故

去る九月一日、中城湾の沖合五キロメートルの海上で、南西石油KK (ジェームス・J・マックグローリー会長) への送油作業を終えたタンカーから約〇リッターの原油が流出

付近一帯が、約一キロメートルにわたって汚染される事故となった。

事故は、発生と同時に、与那原、知念漁協などの漁船の協力で、オイルフェンスを張ったり、アタック、エース (吸着材) を投下したりして、二日夜半には、回収作業を終了、大事な事故には至らなかった。

しかし、今回の事故は、南西石油が本村に來てから、①昭和四七年一月十一日の陸上油送パイプの油洩れ事故②昭和四十八年十月二十九日の海底輸送パイプの保留ブイからの原油流出事故③昭和四十八年十月三十一日の旭タンカーの第一東栄丸からの重油流出事故、等に次で第四回目の事故で村民の怒りと恐怖は最高に達した状態。

村当局も、この事態を重視し、九月三日には南西石油側の管理不行き届きを厳しく追求し、抗議文を手渡



した。  
これに対し会社側は、責任の所在は一樣認めながらも、直接的には自

己の会社起因するものではないとことの重大さが仲々理解していない様子。今後とも会社側の管理体制には厳しいチェックが痛感された。

一方、事の重大さに注目した自治労西原村職員労働組合 (宮城次郎委員長) を中心とする村内労働団体で

は、緊急に村民総決起抗議集会を午後六時から南西石油事務所前で開催。

総決起大会には自治労西原村職、冲教組西原支部、西原村農協組合をはじめ、自治労中城村職労等の支援もあって百人余の盛り上がりのある大会となった。

おりから村では村議会議員選挙のまっ最中であり、同事故と総決期大会のことを聞きつけた候補者三名もかけつけ、大会への連帯の意を表明した。

大会は多くの怒りに満ちた意見発表の後、抗議文を採択し、代表団十四名が直接マックグロリー会長と会見。口頭で抗議文を読みあげ手渡し、厳しく会社側の責任と、今後の対策についての追求がなされた。

会見中、マックグロリー会長は終始、代表団の追求にうなづきおとしで、今後会社の管理不十分、その他の原因で同様の事故が発生した場合の村民の怒りが、いかなるものかを痛感した様子。

同事故を通して、一日も早く南西石油側と公害防止協定を締結し、公害の監視体制の強化が、村当局を始め、多くの村民、労働者の間で叫ばれ、具体化の方向に最大の努力が確認された。

次は、村当局と総決起大会、それから南西石油KKにあててなされた抗議文の全文。

## 原油流出事故に対

### する抗議

貴社の設立以来わずか二カ年余にして、昭和四十七年一月一日重油の陸上輸送パイプの油洩れ、昭和四十八年一〇月二九日流底輸送パイプの保留パイプからの原油流出、同月三十一日旭タンカーの第一東栄丸からの重油流出事故等に対し、その都度強い抗議と関係住民への損害補償要求をしてきたにもかかわらず、去った九月一日またもや海底輸送パイプからの原油流出事故等土壌汚染、海洋汚染

悪臭等各種公害をもって年中行事のごとく公害をまきちらし、何ら反省の色が見られないことは誠に遺憾である。

県下でもCTS問題で政治問題化している今日、平然とこのような事故が発生することは貴社の公害対策の怠慢から起るものであり、住民の不安は益々深まるばかりであり、石油産業がいかに住民の生命を脅かし危険性を内包するものであるかを物語っている。

貴社はこれまでの事故の度に油は完全に回収したといっているが「一度汚された空気や水等は元に戻らない」ことをここで改めて認識し、企業の社会的責任の重大さを確認すべきである。

去った八月二九日もガスターミナルからのガス洩れと思われる事故があったし、これら一連の公害が石油関連企業の公害対策の怠慢と社会的無責任な管理体制が招いた人災であることを思うと今後作業ミスに



## 第二回交通量調査結果報告

去る八月二十八日、午前七時から午後六時にかけて、村企画課が第二回交通量調査を実施しました。

今回の調査は調査地点十カ所、調査員二〇人で行なわれました。

### 第二回交通量調査考察

調査の結果の詳細は別紙に見る通りだが、その結果から昨年の同期に実施した第一回目の調査結果と比較検討すると、車輛交通量の異常な増加ぶりが浮きぼりにされる。

まず各調査地点における単純車輛通過台数(同一車輛が何カ所かでチェックされることもありうる)から見ると、昨年の十二調査地点より二地点少ない十地点での調査にかかわらず、その台数は七九、〇五八台と昨年の六九、三〇三台より九、七五

より事故は続出し、ひいては住民の生命を奪う甚大な公害発生が予想される。

我々村民は今日まで幾度となく抗議、要求してきたが今日の事故を含め、すべての「公害は補償では完全なる解決はできない」ものであり、未然防止が唯一の公害対策の手段であることを貴社の良識をもって判断し、公害管理体制の不備怠慢等によって、地域住民の生活権を脅かす一切の公害を未然に防止するよう怒りをこめて強く抗議する。

南西石油株式会社

会長 ジュームス・

J・マックグロリー殿

昭和四十九年九月三日

五台、一四、〇八%の増加を示している。同じ地点だけを見ると今回は前回の六七、九五一台に対し一六、三五%増(一一、一〇七台増)となっている。

その内訳は普通車輛と、大型車輛に分類してみると、普通車輛の場合、七一、七五五台と昨年より一二、三二七台、二〇、七四%の増加を示し逆に大型車輛は、七、三〇三と昨年より二、五七二台、二六、〇五%減少している。

二つの現象の詳しい考察は後にゆずるとして、大まかに見た場合普通車輛等の増大は、村内における昭和四十八年度の交通事故発生件数一八〇件(前年比、三四件増、二三、二九%)からも類推可能と言えるし、大型車輛等の減少は、村内における

一昨年来の異常な土地開発行為によるの下火現象の結果と考えられる。

①調査地点のうちに、村をとりまく他市町村と連結される六地点で①村内に入流（通過）車輛台数と②村内から流出（通過）車輛台数を四つの時間帯で見ると、本村の道路が益々都市を結ぶバイプライン的な役割が強くなって来ていることが判明する。

しかし、一方では、村内に年々会社、工場等が増加し、それに伴い他市町村からの通勤労働者の流入、及び車輛の増加が著しくなってきたことが、調査結果からうかがえる。

つまり、午前七時から九時に至るまでの交通量において村内に入流する台数が三、九三八台、村内から流出（通過）する台数、二、八七二台と約一、〇〇〇台近い車輛が何らかの形で村内にとどまったことが予想され、通勤労働者の増加の裏付けがなされる。

その他の三つの時間帯では、それぞれ流入車輛より、流出車輛が一〇〇〇～三〇〇台程多く、先きほどのバイプライン的役割はここからもうなづける。

各調査地点での状況を、昨年の結果と比較しながらみると、一〇地点のうち七地点では大きな増加を示し三地点で減少となっている。

増加を示した地点では、その原因は①村内道路の都市部を連結するバイプライン的要素の増大②村内における車輛所有台数の増加等が考えられ、減少した地点においては前回調査の時期に、同調査地点付近での異常な土地造成行為があったことが予想される。

減少の地点を、そういう観点から掘り下げて見ると、棚原交差点の場合、昨年が九、三六九台で、今回は九、一九一と一七八台の減少となっている。ところで、その内訳を普通車輛と大型車輛で分けて考えると、普通車輛は昨年が八、一一七台で、今年は八、五二七台。四一〇台の増加を見せている。ところが、

大型車輛は昨年が一、二五二台、今回は六六四台と約六〇〇台近くも減少している。

第一回目の昨年の大型車輛の激増は、近くのRBC団地造成工事に伴う大型車輛の運行増大が原因だったと思われる、造成がほぼ終了した今回の調査時点では、六〇〇台近く的大型車輛の減少となったと予想される。

小波津入口の場合も、昨年に比べ激減している。



増加する交通量

ば、普通車輛は当然いくらでも増加の現象を見せるものと仮定されるが、これも減少しているのはおかしい。

しかし、これは小波津の部落内で小波津団地と関係する排水工事が長期的に行なわれている関係上、従来池田とか我謝の部落を通過して県道三八号線に出て来る車輛が激減したことの原因と思われる。

つまり、昨年の場合、小波津を通過して、翁長、小那覇に至った車輛

昨年は八、七八一台、今回は七、五一一台と、約一、〇〇〇台の減少である。普通車輛と大型車輛に分類してみると、普通車輛の場合は昨年七二一〇台、今年は六、九四〇台と、二七〇台の減少。

大型車輛は、昨年が一、五七一台今回は、八一一台と、約七五〇台激減している。

小波津入口の場合普通車輛、大型車輛とも減少しているのが棚原入口の場合と違う点である。

大型車輛の激減は、棚原入口の場合同様、近くにある小波津団地の宅地造成が、ほぼピークを過ぎて下降に向ったためであることは予想つく。

ところで、村全体の流れからすれば、

台数は、それぞれ一、〇三六台、二二七台、計一、二六三台だった。ところが、今回は、翁長に四五八台（昨年比五八七台減）小那覇に八二台（前年比一四五台減）計五四〇台と激減している。

しかし小波津入口の場合、通過車輛の減少が、小波津団地の造成工事の段落、あるいは、それに伴う部落内排水工事に原因するとだけとも言えない。

いわゆる、小那覇方向から小波津に向けて進行していった。車輛台数は三、七五一台で、それが小波津入口段階でのチェックでは、三、〇三四台となっている。

当然のこととして数字が合うとは思えないが、しかし、その差が七〇